ノスタルジーな動悸

独マサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ノスタルジーな動悸

【Ｎコード】
Ｎ２４９１Ｄ

【作者名】
独マサ

【あらすじ】
大学生の僕は二回生になった。浮き足立つ新入生を尻目にキャンパスを後にする。そこである男と出会う……。

桜が散っていた。風に乗ってはらはらと舞い散る。時おり吹く強い風は少しだけ湿っていた。大学のキャンパスは騒がしかった。クラブの勧誘の声や浮き足立つ新入生のざわめく声が響く。
卒業生たちのおぼろげな残り香があるが、期待に胸躍らす新入生の鼓動が空気を完全に支配していた。大学に入って気合をいれているのだろう、派手な格好やおしゃれで綺麗な服が目につく。独特の雰囲気がキャンパスを包んでいた。
この雰囲気は嫌いではない。
しかし、今は胸躍らせている新入生達も少し時間が経つと疲れがで始める。自分を大きくみせたり、いい格好をしようと無理をしているからだ。やがて人と比べ自分が嫌になる。
一年前の僕がそうだった。周りにもおなじような人を見てきた。そう思うからか、この喧騒に胸の中がもやもやとしていた。
かん高い声や、話し声、ときおり響く笑い声を背にしながら大学の正門から外に出た。
大学の前の道をゆっくりと歩く。
「良い天気だなぁ」
おもわずそうつぶやくほど太陽の陽気がぽかぽかしていた。
「おっせーよ！」「まってよー」
自転車に乗った子供の二人づれが通りすぎる。目で追うと子供達は少し先の公園に入っていった。ブランコや滑り台があって子供が遊べる場所や、小さなグランドがある公園だ。「公園か……」
妙に気持ちがそそられた。
よし。少し寄っていこう。そう決め公園に入った。囲むように大きな木が立ち並び、ベンチが間隔を空けてゆったりできる場所をつくっていた。桜の木が6、7本立っている一角があり、その横のベンチに腰を落ち着かせた。

桜は見事に咲いていた。ベンチに散っていた花びらをなんとなくつかむ。花びらを目に近づけぼうっとながめる。楕円形の花びらの先端部分、はさみでチョキ、チョキと切ったような角度になんとも言えない愛おしさを感じた。花びらの触った感じは、しっとりとして、さらさらとして、ガラス細工のようなはかなさが胸を締めつける。

「桜ってきれいやなぁ」

もやもやしていた気持ちが桜に癒されて、波のようにあたたかいものがじんわり広がっていった。

「花見……ですか？」

突然声をかけられてびっくりした。目を上げるとそこには２０歳くらいの男が立っていた。

「いきなりすいません。あのー。タバコの火持ってませんか？」

男はさわやかに笑いながら言った。

「――あぁ。ありますよ」

僕はポケットを探ると、ライターを取り出し、男に向かって差し出した。

あ、ありがとう。そう言って男はライターを受け取り手に持っていたタバコに火をつける。

「いやぁー。持っていると思ったんだけど無くて。助かりました」

「えぇ、困りますよね。僕もよくあります」

答えながら、軽く会釈しながら差し出されたライターを受け取り、ポケットからタバコを取り出す。火をつけながら「お近くに住んでいる人ですか？」とたずねる。

「ええ、すぐそこの大学にいってます」

「あっ！　同じじゃないですか。僕もですよ」

「えー！　凄い！　俺新入生ですけど、何回生なんですか？」

僕は吸い込んだタバコの煙を吐き出しながら一呼吸置く。

「じゃぁ、僕の方が先輩だね。二回生だから」

突然強い風が吹いた。大量の桜の花びらが舞う。

砂ぼこりが入らないように目を細めながら、後輩にあたる男をよく

見てみた。線の細い顔つきであごがシャープ。風に揺れてなびく髪の毛も細い。肌がきめ細かくて、女の子がうらやましがってもおかしくないくらいだ。
「凄い風だね」僕が言う。
「……風車があれば、今の風はうれしい風なんでしょうけど」微笑みながら後輩は答える。
「ははっ。それか、夏だったら風鈴がうるさくて仕方が無いよ」出てきた言葉を言ってみた。
「先輩。五月だったら鯉のぼりが大きな口で悠々と泳げますよ」
なんとなく“言葉の勝負”みたいな雰囲気になって僕は思い浮かばなかったので。
「ねじ巻き鳥は歪んだ風を渇望している」と言った。
「えっと……。何ですか？　それ？」
「なんでもない。それよりのど渇いたね」
「ええ。そうですね」
「自動販売機向こうだから、行こうか」言いながら小さなグランドの先を指差す。
「あっ、はい。もちろんおごってくれるんですよね」
急に態度を変えて、高音で甘えた声で茶化して言ってきた。なんだか胸の奥がドキッとなってしまった。
小さなグランドの端で先ほどの子供達だろう。裸足になって、なにやらゲームっぽいことをしていた。線を引っ張り相手の陣地に飛び込んでいる。両足や片足だったり、前後に足を開いたりしているから、ジャンケンみたいなものなのかもしれない。
「子供って無邪気で、いいですよね」
「公園で遊んでいる子を見ると安心するよね」
自動販売機に着くとお金を入れて「なんでもどうぞ」と声をかける。
「ありがとうございまーす」言いながらついさっき知り合ったばかりの後輩はためらい無く、コーラのボタンを押す。
ガタンッ。

「これ知ってる？」言いながらコーラの横にあるドクターペッパーのボタンを押した。
ガタンッ。
なんですか？　と聞く後輩に僕は笑いながらコーラみたいなものだけど、ものすごく苦いのと言う。へーそうなんですか。はじめて知りましたと言う後輩を横目で見ると、ごみ箱の周りにいっぱい散らかっている空き缶を拾って捨てていた。
「偉いね」
「そうですか、普通ですよ」
同じ動作を何回か繰り返すのを僕は黙って見ていた。
目の前の道で自転車のペダルが回転し車輪が近づいてくる。女子高生の短めのスカートと生足が僕の前を通りすぎる。ゴクン。ジュースを飲んでいるのに、のどがかわく。
「今の世の中が歪んでいるんですよ。ごみも普通に捨てれない方がどう考えたって
おかしい」
パンパンと手をはたきながら言う後輩の声は少しむかついているように聞こえる。
「もっともだけど、定規みたいにきっちりと世のなかはいかないよね」
――ふと、わかりきったような口調で意地悪く言ってしまった。
「そんなことないですよ、悪いものは悪いんですし、はっきり言った方が……」
ムキになって言い返す顔が妙に可愛い。整った眉毛が斜めに傾く。言葉をつむぐ唇が桜の花びらのようにしっとりとしていて、僕はハッと息をのんだ――。
「世のなか理屈じゃ、計れないものかもしれないよ」
僕は少し強い口調で言う。
「例えばどんなことですか？」後輩は顔を僕に向け、まっすぐな澄んだ瞳で僕を見る。

「そうだね。例えば……」
僕は吸い寄せられるようにさっき知り合ったばかりの後輩に近寄り、顔を少しだけ傾けガラス細工のような唇にキスをした。
「ちょっ。えっ」
目を大きく開け、一瞬なにが起こったかわからないでいる後輩を見ながら、綺麗なものに理由はいらないんだね。そうつぶやいた。
僕の中の氷山は音を発てて溶け、電流が走る。どんどんと血が流れるのを深く感じる。快感が胸を締め付け、頬が紅潮している気がした。
一度離した唇がたまらなく愛おしく感じ、もう一度コーラの後からタバコの味がする唇を自分に物にしたくて――。
唇で栓をした。
「な、何で……」口元を服の袖で拭きながら君は言う。
「さっきの答えだよ。どういう意味ですかって？　君が聞いた」
「どういうこと……」
「ねじ巻き鳥は歪んだ風を渇望しているんだ」
桜の花びらが乱舞している中で、君にそう言った。
君は本当に綺麗だった――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2491d/

ノスタルジーな動悸

2010年10月17日07時29分発行